

## 投込寺と駈込寺

岩 田 正 城

(会員・佐伯市柏江)

### 一 投込寺

投込寺や駈込寺の女人救済の話も、今は昔の話となつてしまつたが、なお、心をひくものがある、拙文を顧みず纏めたものである。

また、木浦の女郎墓も投込寺の話と同質のものと考えて端書としたものである。

木浦には鉾山の名残として「千人間府」という言葉が残っている。何を意味しているものか知らないが、「間底」とは、鉾山の堀口・坑道、また作業員をもさしているというから、「千人間府」とは、千人もの大勢の人が喧騒を極めながら持場持場で懸命に働いている。そんな隆盛な鉾山のことを表現した言葉ではないかと思うが、どうだろう。

一方、女郎墓というのは、山の斜面の疎林の中にあつて、無造作に石ころを積んだだけの粗末なもので、名前も生国も知れぬ無縁墓だつた。

木浦鉾山の最盛期には、おびただしい山の男達や、それにつれて多くの遊女も各地から集まつて、山里いや町は、いやがうえにも殷賑を極めていたことだろう。しかし、その中の幾人かの遊女は、不幸にも病に犯され、十分な手当も受け得ず哀れな末路を遂げたのかもしれない。生前縁のあつた友人たちの情けで、ここに葬つて貰えたのはせめてもの幸せであつたらう。今、彼女たちの霊は此の墓の下で安らかに眠っているだろうかと哀れに思える。

昔、江戸には遊廓で死んで引取人のいない場合、死んだ遊女を葬る投込寺という寺があつた。普通の場合、死人が出ると、新しく墓穴を掘るのだが、遊女の場合には予め掘つてある穴へ死体を投げ入れるので、投込寺という名が付いたものと思われる。当時は、心中した者の死骸は埋葬を許可せず、取り捨てとされたような時代だったので、死体の投げ込みなども認められていたのだろう。その投込寺は南千住の浄閑寺、吉原の西念寺、新宿の成覚寺などがあつた。

「生れては苦海。死しては浄閑寺」と謡われたその浄閑寺には、名もない遊女の無縁塚が建つており、過去帳に

はおびただし遊女の名が連ねられているという。  
次のような俗謡もあったので、その善し悪しは別として掲げてみた。

思っておせば三歳前 村が飢謹のその時に  
娘売ろか「やさ」売ろか 親族会議が開かれて  
親族会議の結果 娘売れとの御所存に  
売られた此の身は三千両 口に紅つけ白粉つけて  
泣く泣く駕籠に乗せられて 着いた所が吉原の  
その名も高き揚屋町

以下略

## 二 駈込寺

家人の隙きを見て、家を抜け出た女房の目指す縁切寺は、身も知らぬ他国。それに女のひとり旅のこととて足の運びもどかしく、心細い限りだったろう。それに追手をかけられているかもしれないし、暫しの間も心の許せぬ緊張の旅だったろう。

「九里あると 急がっしゃいと渡守」  
という下世話な句がある。渡し舟に乗った女房が先の

道程を尋ねたのだらう。その時酸いも甘いも噛み分けた年配の渡し守が身の上を心配して、優しい一言をかけてやった情景が目には浮かぶようである。

縁切寺に無事に駈け込み、吟味も済んで、入寺が許されたら、後はもう三年の在寺禁足の「寺法」を守って、年季が来たら縁切りはそれで終わるのかと思っていたが事実はそんなに簡単なものではなかった。その陰には役目柄とはいえ、寺役人やその衝にあたった人達の並々ならぬ骨折りがあったのだ。

寺から夫の方へ使者が赴いて離縁状の提出を求めても応ぜず、召喚の手続きを取っても出頭せず、三年の年季が来た時には寺役人は寺社奉行に訴え出る。奉行所はその訴えによって、夫側に對し改めて差し出しを命じる。この段階に及んでは夫の方も否応なしに提出せざるを得なくなる。

此の解決の方法を「お声懸り」と言った。

信仰的であり、庶民性のある尼寺であったからこそ女人に躊躇うこともなく駈け込みが出来たのであろう。問題解決が寺の手に負えないときには、奉行所の威令によって解決した。両者の利点を取り入れた中々当を得た解

決の方策だったと思われる。

縁切寺は、鎌倉山ノ内の東慶寺と上州新田郡徳川郷（群馬県新田郡尾島町）の満徳寺の二ヶ寺で、いずれも尼寺であった。

東慶寺は、鎌倉尼五山の一つで、著名な学者文人等の墓の在る寺としても有名である。

満徳寺は、新田一族の創建と伝えられ、徳川氏は新田氏を祖としているという。大阪落城後、千姫が本多忠刻に再嫁するに先立って秀頼との縁を切るため、入山したといわれている。勿論、身代わりの女性をたてたものであるが、昔なればこそと興味のある話である。

東慶寺は、弘安八年北条時宗の夫人覚山尼の創建で、現在は、臨済宗円覚寺派の僧寺となっている。

時宗は、弘安七年三十四歳の若さで早世した。再度の元寇を排除して国を守ったのは、僅か三年前。あまりにも惜しまれる逝去だった。

夫人には、その嘆きに更に輪をかけるような非運な事件が起きた。生家の安達泰盛が内管領平頼綱との争いに敗れて滅ぼされた。これが霜月騒動である。討てば討た

れる相克の時代のこととはいえ、相次ぐ身内の非運に覚山尼の胸のうちはどうであつたらうか。騒乱の現世を遁れて来世に救いを求め、出家得道に身をゆだねたのも、さこそと思ひ遣られる。

しかし、東慶寺には、まだまだ不幸な人がいた。二十世住職天秀法泰尼その人である。この人は、秀頼の子女で、大阪落城の時、乳母に守られて城を落ちたが、忽ち発見されて、国松丸は、六条河原で斬首。法泰尼も既に命のないところを千姫が家康に嘆願して、やっとのことで助かり、東慶寺に入山させられたものである。

法泰尼が父秀頼の菩提を弔うため雲版を作つて供養したのは、寛永十九年三十三歳の時だった。それから三年後の正保二年に三十八歳で非運な生涯を閉じた。

あとがき

親やはらからのため、我が身を犠牲にして苦海ではない一生を終えた遊女の身の上も哀れであるが、位人身を極めた人々の夫人や姫君さえも、時世時節が来れば、常人より以上に辛い憂き世を涙で送らねばならなかった。投込寺及び駆込寺の哀話は、遠い昔のことながら昨日のこのように蘇り、惻々と胸を打ってやまない。